

レポート評価において求められるオリジナリティと 論題の設定について

成瀬尚志

Originality Required in Evaluating Term-paper Assignments and Essay Questions Types

NARUSE Takashi

Abstract

The criteria for evaluating undergraduate-level term-paper assignments have not been distinguished from that of academic papers. However, as the purpose of evaluating undergraduate-level term-paper assignments is educational, the former should be distinguished from the latter, where the purpose is not educational. Therefore, this paper deals with the problem of how we should evaluate undergraduate-level term-paper assignments; especially whether we should require originality in term-paper assignments, or not. That is because, even though originality is required in order to avoid plagiarism and confirm students' understanding in lessons, we wonder if the demand is too high. In order to address the question, I examined what kind of originality is required according to the essay questions, not in general term-paper assignments. Through analyzing the term-paper assignments given in a philosophy course as a case example, it was found that essay questions could be classified into six types, and moreover, the level of originality required in term-paper assignments could be divided into three types. The results suggested that, as two of those do not display a high-level of originality, they are effectively required in undergraduate-level term-paper assignments.

キーワード：レポート評価、ループリック、高等教育

はじめに¹

現在、「レポートの書き方」や「文章表現」に特化した科目が初年次を中心に多くの大学で導入されるようになってきている。それに伴い、レポートの書き方についてのテキストも数多く出版されるようになってきた。さらに大学教育においてもループリック評価が注目される中、レポート課題もループリックによって評価されるようになってきた。しかしながらレポートをループリックで評価することは容易ではなく、また評価者間の評価のぶれがなくなるわけではない²。ループリックを用いても評価がぶれる理由の一つは、評価者側の評価スキルの問題であるとも言えるかもしれない。もちろんそうした可能性は排除できないが、ループリックは元々評価者に関わらず客観的に評価するためのものであり、それゆえ評価がぶれるのはあくまでループリックの問題であると考えることも可能である。たとえば、ループリックに程度を表す表現（「おおむね」、「十分」、「ある程度」など）が含まれている場合、そのループリックを用いて評価がぶれるのはある意味当然であろう。そうしたぶれをなくす

ためにモデレーション³が行なわれる場合もあるが、その際にその程度表現に関してぶれをなくするために議論し、評価の統一が可能であるならば、ルーブリックで用いられていた程度表現を客観的な量的表現に変換すべきである。

本稿で扱うのはこうした程度表現ではなく、オリジナリティという評価基準である。論証を構成する要素を「主張」、「データ」、「保証」、「裏付け」、「反証」、「限定」の6つに分類して説明する「ツールミンモデル」は、レポートの書き方を指導する際、あるいは評価する際の標準的なモデルとして用いられている。学術論文の場合、この6つの要素のうち多くがオリジナルなものであるが、大学の授業で成績評価のために課されるレポート課題に関しては、授業内あるいはテキストの中で、この6つの要素についてすでにある程度（あるいはほぼすべて）言及されている場合が多い。つまり、学生は既知の情報に基づいてレポートを書くのである。その際、学部レベルのレポートにどの程度まで（あるいはどの点で）オリジナリティを求めるべきであろうか。また、もしオリジナリティを要求しないのであれば、どの点を評価すべきであろうか。この点はこれまであまり検討されてこなかったが、レポートを評価するには非常に重要である⁴。本稿では哲学系科目でのレポート論題⁵を類型化することでこの点について検討する。

1. 学部レベルのレポート評価の基準

学術論文における評価基準は明確である。「学術レベルの新規性があるか」と「その新規な主張を支える論証が十分であるか」の2点に集約できる。しかしながら学部レベルのレポートにこうした基準を適用することは適切ではないであろう。学部レベルのレポートの評価基準に関しては、(学生のレベルにもよるが)形式的な側面(レポートの体裁)以外で考えられるのは「主張に説得力があるか/文章が論理的であるか」、「主張にオリジナリティがあるか」、「授業内容を理解しているか」、「自分で考えて書いているか」といった点であろう。

筆者は長崎外国語大学において3年生の「日本語表現法」(三年間必修の文章表現科目)という科目を担当していたときに、TPP(環太平洋経済連携協定)の是非に関する資料(新聞、書籍、雑誌等)を用い、授業内で議論を行ない、最終レポートでTPPに関する意見を問うレポート課題を出した。その際、多くのレポートが自身の主張と反対の主張について論じ、その問題点について指摘し、自身の主張の正当性を論じていた。これは非常に論理的な構成であり説得力のあるものである。しかしながら論証を構成する要素(ある立場を支持する根拠や、反対の立場に対する反論等)は当然ながら授業内で提供した資料に基づいたものであった。授業内でそうした論拠を抜き出しまとめるワークを課していたことから、多くの学生が難なくレポートを書くことができたと考えられる。一方、これらのレポートは自分の頭で考えて書かれたようには思えず、(引用等の形式は適切であっても)与えられた資料をもとに「切り貼り」されたレポートであった。TPPを題材に取り上げ、それに関する資料を与えた上でレポートを書かせた場合、その是非についての論拠に関してオリジナリティを求めることは非常に困難であろう。それゆえこうした問題が生じたのは論題の設定の仕方がまずかったということに尽きると考えられる。つまり、1. TPPという大きな社会問題を扱い、2. 賛成・反対の論拠や双方の反論の根拠を授業内で提示し、3. TPPの是非についての論拠を問うようなレポート論題を設定し、4. 論理性や説得力を評価観点とし、オリジナリティを問わないとすると、工夫して文章を組み立てるといった作業がおろそかになってしまうのもある意味当然であるだろう。

2. 論題の類型化

先の事例からレポートが論理的に書かれていたとしてもよいレポートであるとは言えないケースがあることが分かった(少なくとも前者は後者を満たすための必要条件であることは言うまでもない)。また、レポートをどのように評価するかという問題はどのような論題を設定するかという問題と密接に関連していることがわかる。当然ながらレポート評価においては、評価したい観点を評価できるような論題を設定すべきである。ここでその点について検討するためにレポートの論題についてある程度の類型化を試みる。網羅的ではないが、レポートの論題には次の6つのタイプがあると考えられる。以下では哲学の授業でM. サンドルの『これからの正義の話をしよう』を授業で扱った場合の論題を例として挙げる。

(A) 是非型／比較型：ある事柄の是非について問う。あるいは、複数の立場を比較して優劣をつけさせる。

「正義についての立場として、あなたは功利主義に賛成ですか、反対ですか。自分の主張と反対の立場を考慮しながら論じなさい。」

「功利主義とリバタリアニズムの違いを説明し、両者の問題点や強みについて説明し、どちらに説得力があるかを説明しなさい。」

(B) 本質追求型：ある事柄の本質を問う。

「功利主義とは何か説明しなさい。」

(C) 発見／提案型：ある事柄の問題点や原因を見だし説明させる。あるいは何らかの問題についての解決案を提案させる。

「功利主義の問題点を挙げなさい。」

「ミニョネット号事件⁶の船長に対してあなたならどのようにアドバイスをしますか。」

(D) 具体例提示型：ある理論や立場が当てはまる事例を挙げさせる。あるいは、授業で習ったことを自分の身近なことと結びつけて論じさせる。

「正義を善に優先させて考えないといけないような事例としてどのようなものが挙げられますか。テキストの中にはない事例を一つ考え（架空の設定でよい）、なぜその事例がこのケースに当てはまるのかについて説明しなさい。」

(E) 意味づけ型：授業で説明した議論の構造を取り出させたり、事柄間の関連を説明させたり、主張の意味を説明させる。

「功利主義にとって善と正義はどのような関係にあると言えますか。」

(F) 再構築型：ある特定の構造をもった文章を書かせる。

「ミニョネット号事件における船長の判断について、問題点を指摘し、その指摘がどのような倫理的な立場からのものかを説明し、船長がどのような行動をとってればよかったかについての代替案

を提示しなさい。]

このようにレポート論題は大きく6つに分類できると考えられる。この類型化に基づいて、次節以降でレポート課題におけるオリジナリティと論題の関係について見てみよう。

3. レポート課題におけるオリジナリティ

レポート課題におけるオリジナリティについて検討するために、まずは授業内容と到達目標という観点から検討しよう。レポート課題でオリジナリティを要求する理由として考えられるのは、「発想力」や「ユニークな視点の提示」といった能力を評価するためであろう。これらは論題の設定によっては非常に高度な要求になる可能性がある。また、授業内容（インプット）と到達目標（ゴール）の観点からそうした点を評価すべきかどうかについては検討すべきであろう。あるいは別の理由として、自分で考えて書いているかどうかを評価するためというものが挙げられる。この基準は大学におけるレポート課題において必ず満たされなければならない最も基本的な要素である⁷。たとえ非常にクオリティの高いレポートであってもそれが自分で考えて書いたものでないなら、教育的な観点からそのレポートに高評価を与えることはできないだろう。現在問題となっている剽窃問題は当然この点と関連している。こうしたことからオリジナリティという観点は、それが満たされていれば自分で考えて書いたことの一つの証拠になることから論題を設定する上で欠かすことができないポイントであると言える。

もちろんこうしたオリジナリティは授業でどこまで説明したかということと密接に関連していることは言うまでもない。同じことをレポート課題で問うたとしても、それが授業（あるいはテキスト）の中で説明されているかどうかによって、オリジナリティの求め方が変わってくる。したがって、オリジナリティについて授業内容との関連でいうと、「授業で扱った内容をそのまま求めるタイプ」と「授業で扱っていない内容を求めるタイプ」に大別できる。レポートの論題を設定し評価基準を定める際にはまずこの点について考慮する必要があるだろう。この区別に基づいて先の論題の類型化を分類すると次のような分類が可能である。

[授業内容とオリジナリティ]

(T-1) 授業で扱った内容をそのまま求めるタイプ

(A)是非型／比較型、(B)本質追求型、(C)発見／提案型、(D)具体例提示型、(E)意味づけ型、(F)再構築型

(T-2) 授業で扱っていない内容を求めるタイプ

(A)是非型／比較型、(B)本質追求型、(C)発見／提案型、(D)具体例提示型

(C)、(D)を(T-1)に分類した場合、レポート課題としては非常に容易なものとなる可能性が高い。また、(E)、(F)が(T-2)に分類されないのは、それらを定義上新たな内容を求めないとしているからである。また、テーマ次第ではあるが少なくとも先ほど挙げた事例に即して考えると、授業で扱っていない内容について(A)、(B)で書かせる事は非常に高度な要求になると考えられる。こうした問いにおけるオリジナリティは学術論文レベルのオリジナリティとなる可能性が高い。こうしたことから現

実的には次のような分類になると考えられる。

(T-1) 授業で扱った内容をそのまま求めるタイプ

(A)是非型／比較型、(B)本質追求型、(E)意味づけ型、(F)再構築型

(T-2) 授業で扱っていない内容を求めるタイプ

(C)発見／提案型、(D)具体例提示型

では(T-1)に分類された論題では、自分で考えて書いているとは言えないようなレポートにしかならないのであろうか。ここで論題と剽窃のしやすさの関係について見てみよう。剽窃がしやすい課題は、ウィキペディアを中心に、インターネット記事をそのままの形で答案にすることが可能な課題である。よって「○○とは何か」といったことを問う(B)はその代表的なものと言えよう⁸。また、ある理論の是非や他の理論との比較といったものは、当該事項の説明の本質的な構成要素となっていることが多いことから、インターネット上でもそうした説明を入手しやすいため、(A)に関しても剽窃が比較的容易であると考えられる。一方、(E)、(F)は授業内容から超え出るものを求めないものの、与えられたものをどのように「解釈するか」あるいは「整理するか」という点が求められるため、そこに学生自身の思考を要求することが可能であると考えられる。また、論題の設定の仕方にもよるが、そうした問いに対する解答は先の(A)や(B)と比べてインターネット上で入手が困難であると考えられる。こうしたことから剽窃のしやすさと論題の設定に関して次のような分類が可能であると考えられる。

[剽窃のしやすさ]

(P-1) 剽窃がしやすい

(A)是非型／比較型、(B)本質追求型

(P-2) 剽窃がしにくい

(C)発見／提案型、(D)具体例提示型、(E)意味づけ型、(F)再構築型

こうした分析から(T-1)においても剽窃がしにくい論題((E)、(F))があるということが分かる。

4. オリジナリティのレベル⁹

ここで、これまでの議論を通してわかった、レポート課題で求められるオリジナリティについて整理してみよう。オリジナリティというと高度なものが要求されるように思われるかもしれないが、「授業でのインプットと同一ではないもの」という広い定義をとればいくつかのレベルに分類できることが分かる。オリジナリティをこのように捉えるのは、これまで見てきたようにこれが「学生が自分の頭で考えて書いたもの」とほぼ一致するからである。このようにオリジナリティの範囲を広くとると、オリジナリティには次の3つのレベルがあることが分かる。

[オリジナリティのレベル]

(O-1) 理論的な問題に関するレベル

(O-2) 学術的な新規性はないが授業内容とは別の何かを求めるレベル

(O-3) 与えられたものから選び出したり、整理するレベル

まず、(O-1)は、各学問分野における理論について、その問題点や解釈などについて新規な意見を求めるレベルであり、それは学術論文で求められるようなオリジナリティであると言える。このレベルのオリジナリティは学部レベルのレポート課題で求めることは困難であろう¹⁰。一方、(O-2)や(O-3)には学術的な新規性はない。しかしながら、右のものを左に移すといった作業（いわゆるコピー）では書けないものであるため、学生は自分の頭を使ってそうした論題に取り組みざるを得ず、そこでなんらかのオリジナリティが生じると考えられる。この場合、オリジナリティはその論題についてのレポートを書く際の必要条件であるため、特に評価基準に組み込む必要はないかもしれない。ここで、先の論題の類型化を、このオリジナリティのレベルに沿って分類してみると次のような分類が可能である。

(O-1) 理論的な問題に関するオリジナリティ

(A)是非型／比較型、(B)本質追求型

(O-2) 学術的な新規性はないが授業内容とは別の何かを求めるレベル

(C)発見／提案型、(D)具体例提示型

(O-3) 与えられたものを与えられたのとは別の形で表現させる

(E)意味づけ型、(F)再構築型

もし(A)是非型／比較型と(B)本質追求型でオリジナリティを要求するならばそれは学術レベルのオリジナリティであると言える。ある立場の是非について通り一遍のことを説明した上で、さらにその是非や、説明の仕方についてオリジナリティを求めるとなれば、それは学術レベルのオリジナリティと言えよう。

(C)発見／提案型や(D)具体例提示型においてオリジナリティを求めるのであれば、それは与えられたものを応用して自分で何かを説明することが求められていると言えるだろう。これは学術的な新規性ではないものの、学生個人が自分の頭で考え出したことが明らかであるという意味でオリジナリティがあると言える。当然ながらその要求レベルはテーマによって変化する。例えば、「リバタリアニズムの問題点を指摘せよ」という論題は、授業で解説がなされていないならば高度かもしれないが、「この大学の問題点を指摘せよ」といったテーマであればそれほど高度ではないかもしれない。また、「具体例を挙げよ」という論題は、当該事項が十分に理解されていればそれほど高度なものとならないと考えられる。

(E)意味づけ型、(F)再構築型に関して言うと、通常の意味でのオリジナリティではない。そのレポートを構成する素材や要素のほとんどが授業内で提供されているからである。そこで求められているオ

オリジナリティは「分節化」「再構築」「抽出」といった作業の中で見いだされるオリジナリティであり、オリジナリティの程度としては非常に低いものであるものの、(E)、(F)において、授業で与えられたものをそのままの形で写すだけでは書けないように論題を設定することは可能である。

このように「論題の類型化」、「授業で扱ったかどうか」、「剽窃のしやすさ」という3つの観点でレポート課題を見てきたが、その考察に従ってオリジナリティの要求レベルを表すと以下のようになる。

	(T-1) 授業で扱った内容をそのまま求めるタイプ	(T-2) 授業で扱っていない内容を求めるタイプ
(O-1) 理論的な問題に関するオリジナリティ	(P-1) 剽窃がしやすい (A)是非型／比較型 (B)本質追求型	(P-2) 剽窃がしにくい オリジナリティ高レベル (A)是非型／比較型 (B)本質追求型
(O-2) 学術的な新規性はないが授業内容とは異なる何かを求めるレベル	***	(P-2) 剽窃がしにくい オリジナリティ中レベル (C)発見／提案型 (D)具体例提示型
(O-3) 与えられたものを与えられたのとは別の形で表現させる	(P-2) 剽窃がしにくい オリジナリティ低レベル (E)意味づけ型 (F)再構築型	***

おわりに

これまでの議論をまとめてみよう。レポート評価においてどのような評価基準を設定するかは当然重要であり、ルーブリック評価が重視されるようになってきたのはその結果である。しかしながら「どのような論題を設定するか」という点についてはこれまでほとんど議論が行なわれてこなかった。しかしながら本稿で取り上げた「オリジナリティ」を評価するか（あるいは評価せずとも要求するか）どうかについて考える上で、「どのような論題を設定するか」は非常に重要な問題である。

また一方で、学部レベルのレポート課題では、学術論文で求められるような高度なクオリティを要求することは困難である。むしろ「授業を理解しているか」、「自分の頭を使って書いているか」といった教育的な観点から評価すべきであろう。そのためにも、そうしたことが適切に測れるような論題にしておくことが重要であり、どのような論題であればどのような能力が測れるのかについての議論が必要である。本稿では、網羅的ではないが6つに論題を類型化した。さらに「授業で扱った内容を求めるかどうか」と「剽窃がしやすいかどうか」という二つの観点でその6つのタイプの論題を分類した。その結果、「授業で扱った内容を求める」場合でも「剽窃がしにくい」ものがあることがわかった。さらに、レポート課題で求められるオリジナリティには、「理論的な問題に関するオリジナリティ」、「学術的な新規性はないが授業内容とは別の何かを求めるレベル」、「与えられたものを与えられたのとは別の形で表現させるレベル」の3つのレベルに分けられることが分かった。学部レベルのレポート課題で学術レベルのオリジナリティである「理論的な問題に関するオリジナリティ」を要求することは非常に困難である。一方、学生が当該事項を理解しているか、また、自分の頭で考えてレポートを書いているかを確かめるためにも、何らかの形でオリジナリティを要求すべきである。よって学術レベルで求められるオリジナリティとは異なるものを要求すべきである。

レポート課題で求めるのに適切であるオリジナリティの一つは応用的説明である。授業内で学習した内容を応用して何かを説明させることは（O-2）「学術的な新規性はないが授業内容とは別の何かを求めるレベル」に当てはまる。この論題のメリットは、レポートで書かせる内容そのものについての説明を授業内で行なう必要がないため、学生が自分の頭で考えないと書けないという点である。授業内では理論的な内容の説明を行ない、それとは異なることをレポートで書かせることができるのである。一方この課題のデメリットは、それほど長い文章にはならないという点である。論題の工夫次第ではあるが、この論題であると数百字程度の文章にしかならないかもしれず、もっと長い文章を書かせたい場合には不適切であるかもしれない。

また、意味づけや再構成といったことを求める論題は、内容レベルのオリジナリティはほとんどないものの、「分節化」や「再構築」や「抽出」といった作業レベルのオリジナリティが要求されるため、少なくとも学生が自分の頭を使って書いているかどうかのチェックは可能である。そうすると、こうした論題の場合、評価基準は「論理性」や「説得力」といった（少なくとも学生にとっては不明瞭な）基準ではなく、もう少し具体的な基準が設定可能であると考えられる¹¹。

こうした論題の分析から、レポート評価における「論理性」や「論拠の提示」といった一般的な評価基準は必要条件ではあっても十分条件ではないことが分かる。また、「論理的であるかどうか」という評価基準は、抽象度が高すぎ、学生がレポートを書く際の指針になりにくいことからルーブリックの中での評価基準としては必ずしも適切であるとは言えないかもしれない。また「論拠の提示」というのは、レポートの論証のクオリティを決定づける有力な項目であるものの、その論拠がどのような形で授業で扱われていたかがポイントである。授業で示したことをその通りに理解しているかどうかを問いたいのであればテストによる評価でも問題ないであろう。レポート課題は「文章作成」を通して学生が当該事項に関して頭を使いながら書くことに意味があるため、何らかの形での「オリジナリティ」を求める必要があると考えられる。こうしたことから、レポート課題を出す場合にも、当然ながら、授業で何を教え（インプット）そして何を到達目標として求めるか（アウトプット）を検討すべきである。こうした点を踏まえた上でどのような論題がありえるかについて本論で考察した。本論ではまだ限られたサンプルでの考察であるが、この問題設定は哲学のみならず、他の学問分野のレポート課題においても応用可能であると考えられる。

注

- 1 本論文は第6回応用哲学会でのワークショップ「レポート評価について考える」での報告「レポート評価と論題の設定について」と第7回初年次教育学会での報告「初年次教育におけるレポート評価と論題の設定について」がベースとなっている。両学会でコメントをいただいた皆さんに感謝します。
- 2 この点については松下・小野・高橋（2013）で詳細に検討されている。
- 3 モデレーションに関しては、田中（2008）や峰（2006）を参照。
- 4 レポート評価についての優れた先行研究としては牧野（2013）が挙げられる。
- 5 本稿ではレポート課題において教員が設定した「（どのようなことをレポートで書くのかについての）指示」を表すために「論題」という表現を用いている。この「指示」と「論題」は正確には同一にはならず、「論題」は学生自身が決める場合もあるが、他の適切な表現がないことから本稿では便宜上「論題」という表現を用いることとした。
- 6 1884年、イギリス船籍のミニョネット号が難破し、船長を含む乗組員4名が救命ボートで脱出したが2週間以上も十分な食料もないまま漂流することとなった。4名のうちの一人の少年が海水を飲み衰弱したことから船長が彼を殺害し、残りの三人の食料としたという事件。
- 7 オリジナリティそのものを評価基準に入れるかどうかは別問題である。この点については後述する。
- 8 「～について概略を述べよ」という論題では他の論題よりも剽窃が多かったということは、花川（2013）でも指摘されてい

- る。
- 9 以下ではオリジナリティの「レベル」を分類しているが、共通の尺度に基づいた程度の度合いを示しているわけではないので正確には「タイプ」とすべきかもしれない。しかしながら教育的な観点からするとそれぞれには明確な難易度の違いがあると考えられることからここでは「レベル」という表現を用いる。
 - 10 単なるアイデアや着眼点を評価するのであれば論題によっては可能かもしれない。ただそれを正当化する論証を組み立てさせることは非常に困難である可能性が高い。そうすると、「論理性」といった観点を評価基準から放棄しないのであれば、そうしたオリジナリティを要求することは困難であると考えられる。
 - 11 たとえば、分節化や再構成のための要素を列挙し、それが盛り込まれているか、といった基準を提示し、それらの構成要素が適切な順序で論述されていれば結果として論理的な文章になるような設定は可能であると考えられる。

【参考文献】

サンデル・マイケル『これからの「正義」の話をしよう』、鬼澤忍訳、早川書房、2011年。

田中耕治『教育評価』、岩波書店、2008年。

花川典子「コピペ対策の実践—コピペ検出システム」、『思考し表現する学生を育てるライティング指導のヒント』、関西地区FD連絡協議会・京都大学高等教育研究開発推進センター編、ミネルヴァ書房、2013年。

牧野由香里「「十字モデル」で協同的に論文を組み立てる」、『思考し表現する学生を育てるライティング指導のヒント』、関西地区FD連絡協議会・京都大学高等教育研究開発推進センター編、ミネルヴァ書房、2013年。

松下佳代・小野和宏・高橋雄介「レポート評価におけるループリックの開発とその信頼性の検討」、『大学教育学会誌』、第35巻第1号、2013年5月。

峰明秀「社会科目標準拠評価におけるモデレーションによる妥当性・信頼性の確保」、『大阪教育大学社会科教育学研究』、第5号、2006年12月。

本研究はJSPS 科研費26381108の助成を受けたものです。